

これまでの農福連携研究、これからの農福連携研究

千葉大学 園芸学研究院 教授 吉田 行郷

2021年の3月に16年間お世話になりました農林水産政策研究所を辞して、千葉大学で教鞭を執ることとなりました。ご縁がありまして、客員研究員として、引き続き農林水産政策研究所の研究に関われることになり、大変うれしく思っているところです。

同研究所では、13年間、農福連携の研究に関わらせていただきましたが、振り返ってみれば、チームで取り組む研究体制が上手く機能して、この分野での研究を大きく進めることができたと思っています。農福連携の研究は、初代の農福連携チームのチーム長を買って出ていただいた香月敏孝さんと最初に学術的な研究論文を発表していただいた飯田恭子さんと私の実質3人でスタートしました。その後、次第にこの分野での研究を志向する研究者の参画を得て、また、客員研究員の皆さん、連携研究スキームに参加していただいた研究者の皆さん、コンサルティングフェローの行政官の皆さんにも次々に加わっていただき、素晴らしい研究体制が構築されて、大変心強く思っています。

本稿では、これまでの農林水産政策研究所における農福連携の研究成果を振り返るとともに、今後、同研究所に期待したい研究についてご紹介させていただきます。

農林水産政策研究所では、2007年度に研究チームを編成して、「農福連携」に関する研究を開始しました。最初の研究成果では、農業に取り組んでいる複数の障害福祉サービス事業所の事例分析から、そうした福祉施設が、障害者の収入を高めるための就労活動、地域の農業を守る社会貢献の活動として、次第に農業への取組を本格化させていることを解明しました。また、こうした取組が、連携する農家等の経営の安定化や発展にも寄与していることを明らかにしました。さらに、福祉施設が農家等と密接に連携している取組では、諸課題が解決されつつあり、農地の活用や就労の場の拡大にも効果があることを解明しました。他方で、福祉施設と農家等の連携のみでは解決が難しい課題もあり、農業サイド、福祉サイド双方で公的な支援が必要なことを提示しました。当時は、農福連携への支援がほとんどない時代

でしたので、公的な支援の必要性和その方向性を示すことができたことは時宜を得ていたと思っています。

その後、アンケート調査結果を中心にした全国的な動向の解明、企業による農業分野での障害者雇用の実態分析、先進事例の発展プロセスの分析による発展段

階ごとに必要な支援の解明、地方公共団体による支援の現状と課題、地域ごとに異なる課題と必要な支援の解明、社会で生きづらさを抱えた人々のための農福連携のあり方の解明にも取り組んできました。

農林水産省の農福連携に対する最初の支援事業は、都市農業への支援の一部でした。その担当の方から、「農林水産政策研究所の研究成果のおかげでこの事業を創設できました」と言っていた時には、本当にこの分野の研究を続けてきてよかったと思いました。その後、農林水産省による農福連携に対する支援は、農村地域も含む農業分野全体に広がりました。厚生労働省にも都道府県を通じて支援を強化していただき、現在の支援体制の原型が整いました。まだ地域で進捗に差がある状況ではありますが、そうした支援のおかげで、農業分野での障害者の就労の場づくりはかなり進展したのではないのでしょうか。

次に求められるのは、障害や疾患の特性から仕事としては農作業が上手く行えない方々や、認知症のために仕事はできなくなってしまったものの体は動かせる高齢者のために、日中の癒しの場として農作業を提供する農園づくりに役立つ研究ではないかと思っています。この研究目的のために、農林水産政策研究所と所外の研究者が連携研究スキームで研究を実施しています。本研究の成果を結実させて、欧州の先駆的なケア・ファームを参考に、日本向けにアレンジされた癒しの農園づくりに寄与していただければと願っています。もちろん、客員研究員として、私も関わっていけたら幸いです。

